

Q1SQ1 日本教育学会への希望(自由記述)
シンポジウムの登壇者の年齢構成を再考してほしい
各地方ごと又は都道府県ごとに、若手会員の交流の機会を設けてほしい。
超中学校や、高校教員などの研究グループがあるとよい。
教育学以外の分野の若手研究者との学術交流機会の提供
若手会員が自身の肩書にとらわれずに業績を上げやすい環境の整備を希望します。ただし、そうした業績の質保証については厳正な学会であって欲しいと思います。
学会大会で、託児の設置が無いことで、参加をためらうことがあります。補助があったとしても、土地勘の無いところで、自分で託児をみつけて、という負担が大きく、どうしても子どもを預けられないので、参加できないということがあります。学会大会は研究交流だけでなく、それ以外の情報交流も重要だと思っており、参加できず研究のモチベーションが下がっていくことにつながると思います。
・a)については、当然ですが、質が維持されたいです。・日本人が一から英語論文を書くことは難しいので、(若手会員に限らず)広く国際的に読んでもらいたい論文を学会で選んで、専門家に翻訳してもらい、学会誌に掲載するという取り組みはどうでしょうか。・大会のラウンドテーブルについて、知の創造という観点から言っても、もっと推進されるべきで、大会日程の中心に位置させる、時間を分散させて複数参加できるようにするなどの工夫が必要だと思います。
参加が自由な各種研究会情報などを流せるメーリングリストを作ってもらったら、便利で有益な気がします。
・研究方法論の勉強会の開催 ・他の学会との共同企画
研究支援金制度。
日本教育学会大会の託児施設の設置
地区研究活動での若手会員の研究活動の奨励を希望します。
実践的な教育研究やこれまで誰も検討していない研究については比較的評価されやすいように感じます。それ以外の研究(たとえば既存の研究に対する批判や直接現場の教育にかかわらないような研究)についても内容を吟味し評価できる体制を整えることを希望します。
学会内の規定的には特に「若手」が参加できないような仕組みは設けられていないはずなので、そもそも若手研究者個人の取り組みの問題のように思う。若手研究者自身に対して特別な何かを講ずるよりは、若手研究者を育てる立場であるだろう研究者に対して何か支援をされてはいいか？
教育界の最新情報、政府の政策に対する忌憚らない見解(批判ばかりでなく建設的な意見や、加味しておくべき状況や知見、もちろん学術的な立場からの)がわかる学会・学術雑誌でもあってほしい。
他領域の学会との交流。(日本社会学会・日本犯罪社会学会・日本社会病理学会・日本心理学会・日本質的心理学会・日本臨床心理学会・日本保育学会・赤ちゃん学会……などなど)。若手研究者を表彰する制度は、各分野の学会にすでにあるので、日本教育学会があらたに創設することには反対です。学会賞が権威を持ちすぎってしまうので、ゆくゆくは弊害のほうが多くなるでしょう。
おもしろい研究は、方法やまとめ方に足りなさがあるても即不採択にせず、教育的査読やサポート的な手続きで、積極的に評価して、論文掲載まで導いてほしい。他学会一般に、方法やまとめ方ばかりを気にして、おもしろくない研究ばかりが掲載され続けているように感じる。
大会以外で若手同士が交流できる機会(セミナーなど)を設けてほしい。
所属先によって大きく異なるが、(あるいは大きく異なること自体が問題とも言えるが)若手研究者の置かれている研究環境が大変厳しくなっており、学会に何かを期待することで状況が改善されるようなものではないという悲観的な認識を持っている一方で、上記項目にあるような若手研究者に対するアフターマティブ・アクション的な改善はマイナスでは無く、是非進めていっていただきたい。

日本教育学会として、大学院生の研究資金拡大に関する政策提言をしてほしい
関東教育学会など、ブランチの学会にも同様の仕組みが出来るような資金援助
大会時に保育所等、子育て世代に対する支援を今後も行って
連絡事項を、学会誌上やHP上ではなく、E-mail経由で知らせてもらいたい(その後、HP上でも告知)。学会誌上での広報のみでは、気付いた時には、すでに締め切りが終わっていることもよくあるし、HPは、何か求めている具体的な情報がある場合にしか閲覧しないため。
若手という大きな括りだけでなく、マイノリティ(小規模大学院や研究室、セクシュアルマイノリティなど)へのエンパワーメントになるような配慮があるといいと思います。
若手研究者が相互の研究的交流を深めるには、一つの研究課題を中心とした共同研究を組織し、そこにに関わりながら研究的素養を培うという形が、もっとも意味のある交流と連携を生み、若手研究の「活性化」につながると考えます。しかしながら、大学の研究費で共同研究を行うのには非常に困難であり、例えば科研費の「若手研究」であっても単独の研究を対象とするなどの条件設定があるなどして、共同研究の行いにくい状況があります。単独で研究活動が十分にできるようになってから、共同研究へという認識もあるのかもしれませんが、若手の共同研究が先達を呼び込みながら、研究自体を膨らませることもできるはずで、上記の問題を踏まえ、学会が本腰を入れて若手研究者の育成、若手会員の研究的交流を求めるのであれば、学会独自の研究費助成(若手研究者研究助成制度)、あるいは若手研究者を中心として行われている共同研究等への助成(若手共同研究助成制度)など、助成金制度の設置を検討していただきたいです。また、研究助成チームに対しては、大会などで研究経過・研究成果を報告するなどの場を設定し、学会の研究活動の一環としての性格を濃くしながら、学会自体を盛り上げていくことも可能となるのではないのでしょうか。以上、「自由に」ということで記入させていただきました。ご検討、よろしく願います。
若手研究者の奨励費や論文コーナーを設けていただきたい。
30-40代ぐらいの「少し上で、話しやすい」層の方と交流機会を増やす。規模が大きいのので、関心のあるテーマの近い研究者と出会える機会を増やす。
規模が比較的大きい学会であるので、継続的な研究を行う部会に若手を参加させてはどうかと考える。
日本教育学会は「教育〇〇学」の学会とは異なり、教育学全般を対象とするため、その幅広いネットワークを活かすことが大切なのではないかと考えています。あとは、若手向けにポスターセッションを設けてみるというのも面白いかもしれません。
学会誌を手にとってみても、投稿論文が掲載されておらず、図書紹介ばかりなので、新刊本の案内のように感じている。教育学研究の水準については本学会を信頼しているが、論文は掲載されることが難しく、投稿先としてまったく魅力がない。文句ばかり、申し訳ありません。
東京だけでなく、地域に支部のようなものを立ち上げ勉強会や研究会を運営していく。
若手会員による共同研究の奨励(財政的支援を含む)
若手理事の登用。あわせて、理事の就任回数制限。
研究者が学会の中だけでなく、社会に発信できる場を設けること。
若手と限定する前に、全体の教育学研究の活性化を考えるべきではないか
特にありません。
常勤職を持たない若手会員に対する学会出張旅費の全額支援。財源は、常勤職を持つ会員の学会費値上げによって確保する。
原著論文掲載の機会をもっと増やしてほしい。また、若手研究者の定義から年齢を削除し、研究年数で測っていただきたい。

特になし
教育実践に対する位置付けが低いように思うので、その正統な位置付けを意識してほしい。
学会誌(日本語・英語雑誌両方)をThomson Reuters社のWeb of ScienceのSocial Sciences Citation Index(社会科学分野の引用文献データベース)等の国際水準のデータベースに掲載されるように対応して欲しい。日本の雑誌は、国際的に評価されず、若手としては、発表する意義を見出しにくい。
修士論文や研究ノート段階の草稿をもとに議論する場をもうけてはどうか。
Fellowshipあるいは助成金の機会を設ける
若手による、従来の形態にとらわれない研究を紹介するセッションが学会で設けられていたら良いと思う。また、若手が自分の知識や問題意識を社会運動に繋げることをベテランがアシストする機会があったら素晴らしいと思う。

Q2SQ2 ホームページ改善点(自由記述)
論文投稿の査読結果の種類、結果が出るまでの標準期間、掲載率など情報が欲しい。
大会案内の冊子が届くのが直前であり、プログラムなどは、その前に公開していただければ、交通や宿泊などの日程的なスケジュールが調整しやすい。
例えば日本社会学会なんかと比べ、学会に関する情報が乏しく、しかもウェブ掲載が遅い(特に学会関係)ため、もっと充実させたほうがよい
大会のホームページにワンクリックでアクセスできない
特に思いつきません。
過去の紀要へのリンク(目次だけでなく個々の論文)を作成してほしい。
他学会へのリンク機能の充実など。
リンクを充実させてほしい。
出版助成
「関連NEWSと公募情報」のページについて、両者は別々にした方が見やすいかなと思います。
他の学会に比べて情報量が少ない。講演会・シンポジウムの情報をもっと載せて欲しい。
紀要原稿募集に関する情報の充実ならびにこれまでの学会誌原稿の掲載を希望します。
海外の教育関連学会へのリンク集を設けていただけたら有難いです
記事へのリンクが何層にもなっている点。記事をクリックしても、一行の説明のみで再度リンクをたどらないと必要な情報にたどりつけない点。
現在、WordPress 3.6.1でページを作成されているようですが、バージョンを更新して内部検索をしやすくすると良いかもしれません。古い記事を探しにくくなっています。ただ、なかなか手間がかかる作業だと思いますので、喫緊の課題ではなく優先順位としては高くないだろうと感じています。日本で国際会議を開催する予定であるならば、手取り早いところだと、もう少しリンクを充実させたり、会長からのメッセージを掲載したり、といったことを進めると良いかもしれません。(英語版があると良いですが、まずは邦語から。)
会員はオンラインで学会誌を閲覧できるようにしてほしい
URLが日本語で表記される点(リンクを貼る際に変換しなければならない)
見たことが無い者でも、見て見たいと思えるような頁にして欲しい。
情報のアップデートが遅い。

文献 図書 等の紹介のコーナー の設置
ほとんど見ないので回答できません。
英語ページの充実

Q3SQ3 参加したい企画(自由記述)
特定の研究課題について、様々な領域から取り組んでいる研究者が参加するような取り組みなどがあれば参加したいと思います。
・自分が参加するかどうかはともかく、上記に提案された企画は実行する価値がいずれも高いものと考えます。・実施方式についても、情報技術を利用し、遠隔でも参加・視聴できる方法を検討されることを望みます。
現場の指導者からの意見の検討の場
教育現場における教師・援助者との共同企画(研究指定校や著名な附属小中学校ではなく地域の実情に根ざした教育現場)
学校現場で起きている問題の共有及び合同研究
教育学と接点のある諸領域との共同研究
特にありません。
高校教員をしながら、学会に所属しています。いまの段階ではほとんど名義ですが、中高の教育現場と連携した研究の実践発表などあればありがたいです。
教育学研究者が社会問題を議論し合い、研究者にしかできないアクションに繋げるようなワークショップ。

Q28 意見・要望 他の学会で魅力的だと思った企画(自由記述)
底辺校の教育実践の共有
大会で、ラウンドテーブルを自ら開催することができること
大会時の部会によっては、ひどく個人的な趣味のような体裁で研究をされているような方がおられるように思います。方法論や先行研究における位置づけ等も十分に考慮されておらず、違和感を覚えることもあります。
学会の企画はあまり魅力はなく、ラウンドテーブルのほうが魅力的になっている
教師教育学会は必ず託児を設けてくださっており、子どもが小さいころは参加をためらわずに済み、大変助かりました。また、他学会から学会賞をいただいたことがあり、それが大学内での他の賞の受賞に結びつき、今の就職につながった側面もあるかと思っています。ですので、奨励賞のようなものを設けるのも大切なことかと思いました。多くの学会が若手のラウンドテーブルや交流会を企画していますが、日本教育学会の規模や抱える研究者の多さを生かした、研究能力の向上や研究上の模索を支援するような取り組みがあればいいなと思います。若手研究者としていろんな企画をすることは他の学会でもでき、それが研究のモチベーションを高めることにつながっていますが、能力につながっているかは微妙なところだと思います。また、若手研究者の取り組みを推進するが、理事は年配のばかりという学会の運営にも疑問があります。他学会で学会員が減っているから、若手の取り組みを推進するというような方針が出されたことがあり、疑問をもちました。若手研究者は有期雇用が多く、常勤職に就いた途端に多忙を極めます。研究者としてのキャリアが不安定になるなかで、研究成果を残し、学会活動にも主体的に参加していくのは非常に困難です。このような状況に対して、後押しするような取り組みも必要かと思っています。
学会としての学校の設立を検討してほしい
・学会誌に掲載されている書評・図書紹介について規程が見当たらず、どのように原稿が募集され、掲載されるのか、わかるようにしていただきたい。・今回のアンケート実施は、好感を持ちました。関係者の方々に御礼申し上げます。・正直に述べると、退会しようか悩んでいます。費用に見合う知的刺激を受けないからです。全体的に内向きの議論をしているような閉塞感を持ちます。それを打破するために若手の力が生かされることを期待します。
院生だけでなく、非常勤・特任職の若手研究者に経済的な支援(学会費の減額等)をいただけると大変助かります。
最近入会したばかりですので、正確なことは申し上げられませんが、メールによる情報発信を積極的にしていただけるとありがたいです。
教育に関わる多様な領域の研究者がいるので、(困難ではあろうが)領域横断的なテーマで、複数の立場の研究者が議論する場を設定していくと盛り上がるのではないかと。現状、せいぜい3つ程度の分野に偏っている。たとえば第74回大会の学力に関する公開シンポジウムは教育社会学と教育方法学に偏っていたので、ここに心理学・経済学・工学も加えていき、互いに批評しあうと面白かったと思う。
日本教育社会学会の若手セミナー
大学教授など現場を知らない方と幼児教育現場で働いている人との幼児教育に関する発表。大学教授の発表は机上の空論で、現場では役に立たなかったり、すでに実践しているが問題があるため、その改善方法が見つからず困難をとまなっているなど、現場とのずれが大きいことがあからさまになった小規模学会がありました。とても興味深く、現実と発表の内容を見直す良い企画だと思います。
学会誌や学会大会に参加することで研究上の刺激をいただいております。今後ともどうかよろしくお願いいたします。
学会における、小・中規模(参加人数、領域がしぼられていること)での比較的長い持ち時間の研究発表と議論
あまりそうなりすぎるのはどうかと思いますが、日本保育学会などでは、現場人の報告がほとんどです。そういう雰囲気にあこがれはありませんが、それはそれで、活気がああって、魅力かなと。教育学系の専門学会(日本教師教育学会、日本教育方法学会、日本教科教育学会、日本教育社会学会など)、あるいは、心理学系系の学会では、若手が多く参加し、学会を牽引しています。そういう雰囲気は魅力的に感じます。日本社会学会では、査読プロセスそのものを分析した論考が報告されたことがありました。興味深く拝読しました。教育史学会などは査読プロセス(と、学会における学術論文の位置づけ)を自己点検することがないので、あと10年立てば、若手が枯渇し、斜陽学会になるでしょう。日本教育学会もそうならないことを祈念しています。

日本教育社会学会の若手交流会
学内業務が多くそもそも学会に参加できない。教育関係や教員養成の大学教員のポストが魅力的ではなくなっているように思う。
論文の書き方・まとめ方の手ほどき
研究発表の申し込み締め切りを何らかの文書で知らせて下さると助かります。
貴学会誌の厳しい査読水準を、ぜひ今後もキープしていただきたく存じます。
教育学関連諸学会共同シンポジウム(2012年)
今年度の学会、部会の時間が少なすぎませんか(例年そうだったかもしれませんが…)。自らの発表を行うと、他に出られる部会の一つのみとなってしまいます。シンポジウムもおもしろいのですが、部会での発表をもっと聞きたいと思います。同時に行われる部会が多いと、人が分散して参加者が少ない部会も散見されました。
学会の運営に若手会員が積極的にかかわっているところでは、若手会員支援への意識が強いように感じます。たとえば、会費や大会参加費が減額できなくても、若手会員の参加を促すためにカンパを募っている学会がありました。若手会員のなかには、奨学金による負債や不安定雇用(非常勤、有期雇用など)による生活の不安を抱えている人が少なくありませんから、経済的事由により研究を断念せざるをえないような状況にある若手会員への支援が、とくに重要だと考えています。
このアンケートに記載したこと以外には思い当たりません。
採用される論文を多くしていただきたいと思います。
魅力的企画:大会前日に若手研究者が集まる企画。要望・感想:論文投稿で即不採用と修正再審査の間にどのような基準があるのか、いまいち不明である(論文としての完成度が低い、と言われればそれまでですが)。要望:テーマ部会Bの企画者(可能であれば理事会提出の趣旨)が「彙報」欄に掲載されてもよいのでは(6月号=エントリー後でも)。確認:学会大会発表申込み時と、要旨提出等までの間で、申請内容(タイトル、副題、共同発表者など)が変わる事案について気にかかる。
合宿は興味はありますが名称上出張扱いになりにくくなると思うので、ワークショップないしは研究会、という名称で開催があれば参加しやすくなるかと存じます。
学会大会の正規プログラムの前日に、博論や修論の構想について意見交換しあう若手研究者(と中堅・ベテラン研究者)の研究交流会が催されている学会があります。通常の口頭発表とは違い、自分の研究上の悩み等についてもフロアにぶつける(フロアの胸を借りる)ことのできる比較的自由的な時間となっており、そのような機会は用意されてもいいかなと思います。
何年か続けて同じような発表者で分科会が構成されて以来、大会参加から遠ざかっています。発表件数が少ないこと一因かも知れず、分科会構成の問題だけではないかも知れません。学会の規模の割に、大会での発表が少ないことも気になります。また、研究倫理の問題がありそうな発表や、前年度の大会とあまり内容が変わっていない研究発表などは、大会実行委員会や司会者がチェックする機能が必要かも知れません(残念ですが)。ただちに改善できる問題ではないかも知れませんが、ご検討下さい。
特になし
日本教育学会では、大会などでいつも勉強させていただいております。若手のイベントを開催する際は、ぜひ非会員でも参加できるようにしていただけると、門戸が広がると思います。
今まで大会では同じ部会に行くことが多かったのですが、異なるテーマの部会にも参加してみたいと思いました。多くの研究者で組織されている日本教育学会に所属していることをもっと活かしていきたいと思います。

日本教育学会(北海道)大会に初めて参加しました。私は看護学が専門なのですが、教育・研究機関に所属するため、今後発表や投稿ができればいいなと思い、参加しました。しかし、一部の演題のみを聞いた感想ですが、発表はたんとんと抄録を読むだけでほとんどの方の発表内容はとてもとても聞き取りづらく、本当に教育関係者なのかと疑った次第です。とてもショックでした。このような意見を出す機会もなく、当日はアンケートもなかった(見つけられなかっただけかもしれませんが)ため、どうやって参加者の意見を反映されているのか疑問に思いました。

学校歴史資料論

教育思想史学会のコロキウム(3時間。ラウンドテーブルの拡大充実版)

論文を投稿した際、不採択でも査読者に反論できる機会が欲しい。以前、論文を投稿した際の査読コメントが、極めてひどいものであった。

大会が盛り上がり欠けることが、一番の課題ではないかと思えます。

若手研究者の育成ももちろん重要だが、教育学部や職業としての教員を希望する高校生(子ども・若者)の急速な減少に危機感を感じ、小中高校生を対象に、「教育学ってこんなに面白いんだよ」「教育ってこんなに素敵な活動なんだよ」ということが伝わるようなイベントや講演、ワークショップなどをどんどん企画し、将来の教育学を担う者への種まき活動を大切にしてほしい。そのために、日本教育学会の規模ならば、全国の小中高校への会員による出前講座実施や学会HPに子どもサイトを作ったり、学会大会時に子どもは無料で参加できるイベントを行うなどの活動を行うことができるのではないかと思います。

教育の今日的課題について、社会に対して、研究で得られた知見をもとにした議論を通じて、より積極的に意見を表明しても良いのではないかと思います。

大学で開催された学会の場合に大学寮の一部に出席者が集中して宿泊し交流が持てるような配慮がなされていた

日本教育学会は多様な専門領域の研究者で構成されており、そのことはとても魅力的ではあるが、教育社会学、教育心理学などのディシプリンベースで考えたときには、研究や議論が個々の専門ディシプリンの学会に比べて弱い。ディシプリンベースでの議論の底上げを図ることが若手研究者に特化した支援よりも重要ではないか。学会全体の研究が高度化すれば、若手研究者の参加も自然に増加するのではないか。

特になし

高等学校などで勤めながら研究活動していくようなケースが増えていくと、学会の活性化につながると思います。そのような研究の道を援助できるシステムがあると良いと思っています。

発表時間が1時間のもの。日本教育学会は短すぎます。

年会費が高額。